

わたしの^{こ ん や く し ゃ}婚約者は
^{が く え ん}学園^{お う じ}の王子さま!

^{く り}久里いちご・作

^{や ま ふ き い る}山吹色・絵



アルファポリスきずな文庫



ラスト	その23	その22	その21	その20	その19	その18	その17	その16	その15	その14	その13
大好き	そばにいて	勇気を出して	正々堂々	雲間から太陽	しまった！	お似合い	転校の理由	やめちゃえばいいのに	恋に落ちた音	ドキドキハラハラ	嫌な予感、大的中
215	206	196	188	180	172	165	156	145	134	123	115



もくじ

その12	その11	その10	その9	その8	その7	その6	その5	その4	その3	その2	その1	プロローグ
本当の波乱	真中くんVS奏多	猛アプローチ！	聞き間違いないよね？	みんなでカラオケへ！	新たな出会い	罰が当たったんだよ	キムン死にしちゃうー	危ない！	婚約の理由	たつた一人の特別な男の子	わたしと王子さまの出会い	学園の王子さまとわたしのひみつ
106	97	89	78	69	62	54	43	33	25	17	11	6



登場人物紹介



つぎしろう ひめの
月城姫乃 中1

ある日転校してきた、人気雑誌『smile』で活躍中のJCモデル。なぜか奏多のことが気に入ったようで……!?



まなか たいよう
真中太陽 中1

体育祭実行委員会で出会った明るくてチャライ男の子。とあるできごとがきっかけで莉子に興味を持つ。



ながの ゆみ
永野由美 中1

莉子のクラスメイト。熱狂的な奏多のファンで、1年生ながら漣奏多親衛隊に所属している。流行に敏感。



ゆうさ けい
結城さん 中1

莉子のクラスメイト。足が速くて、体験入部期間中にもかかわらず陸上部期待の新星とウワサされている。



すなは けい な
楠玲奈 中3

漣奏多親衛隊の隊長をつとめる気強い美人。奏多にアタックする月城さんのことをよく思っていない。



さざなみ かな た
漣奏多 中1

学園の王子さま。女子に興味がないワール男子だけど、婚約者の莉子のことを溺愛している。本当は婚約のことを言いふらしたいのに、莉子に止められているのがフマン。絵を描くのが好き。



の さき り こ
野崎莉子 中1

運動が得意なフツウの女の子だけど、実は幼なじみの奏多の婚約者。婚約のことはみんなにナイショにしているのに、奏多がところかまわずアプローチしてきてドキドキしている。

プロローグ 学園の王子さまとわたしのひみつ

わたし、野崎莉子がこの春に入学した桜峰学園には、みんなの憧れの王子さまがいる。

「きやく！ やばいつ。漣くん、今日もかつこよすぎなんだけど！」

「今日も国宝級のイケメン！ はあ。ちよつとでいいから、お近づきになれないかなあ」

「クールで、スキがないよねえ。笑った顔、見てみたいなあ」

「いや。無表情であの破壊力だよ？ 笑顔を向けられた日には確実にキyun死にする！」

クラスの子たちが目をハートマークにして語っているのは、漣奏多のことだ。

話題の張本人である漣くんは、イヤフォンをつけて窓の外の葉桜に目を向けている。

そのきれいな顔から感情は読みとれない。

サラサラの黒い髪に、雪のように白い肌。

大きな目は、透きとおっていて宝石みたい。

たしかに彼は、少女マンガの中から抜けだしてきた王子さまのようだ。

女の子たちが騒ぐのもうなずける、完ぺきなイケメンぶり。

ぼんやりとしていたら、背後からツヤつばい
ため息が聞こえてきた。

「はくくく、今日も今日とて漣くんが尊すぎる！」

永野由美ちゃんだ。

由美ちゃんとは、二週間前の入学式で仲よくなった。

「あんなにかつこよくて、こんなにもてはやされてるのに、まったく浮ついてないんだ
よ？ 存在が、女子の夢そのもの！ 今日
も生きていてくれてありがとう漣くん！」

由美ちゃんは、かなり熱狂的な漣くんファ



ンでもある。

なにせ、**漣奏多親衛隊**に入っているくらいだ。

「えつと……由美ちゃん、落ちつこう？ 鼻血たれてるよ」

「落ちついてられるかってーの！ 莉子、あれ以上のイケメンは身近にそうそういないよ！ あたしのイケメンレーダーに狂いはないっ」

「あはは。そ、そうなんだあ」

「うーん。おかしいなあ」

「えつ。なにが、おかしいの？」

「莉子ってさあ、漣くんのことになると、みように冷めてない？」

ギクリ。

「漣くんほどのイケメンを前にして、どーしてそんなにヘーゼンとしてられるの？ みんなメロメロじゃん。おかしくなるのが普通だって！」

うっ！

由美ちゃんにジト目で見つめられ、じわじわと追いつめられていく。

わたしだって、漣くんは完ぺきなイケメンだと思っ

あの顔のよさで成績優秀、おまけに運動神経までいいときた。

だけど、わたしにとつての漣くんは……ただそれだけの存在じゃない。

どうしよう。ボロが出そうだし、この話はもうつづけたくないなあ。

でもそんな願いが届くわけもなく、由美ちゃんはそのまま話をつづけた。

「うーん。もしかして、同じ小学校だったから、見慣れてるとか？」

「あつ……そうそう！ そういうことだよ！」

「えー、そういうものかなあ。あのレベルのイケメンになると、見慣れるのも難しいと思っ

うけど」

さつきから、冷や汗がだらだらと止まらない。

由美ちゃんに、なんて返答をすればいいのかわからなくて。

野崎莉子。
どこにでもいる、ごくごく普通の中学一年生。

運動が得意なぐらいで、他にこれといった特徴のないわたしには、すごいひみつがある。わたしは、学校の誰にも、このひみつを知られるわけにはいかないんだ。

その1 わたしと王子さまの出会い

その日の放課後は、体験入部に行くという由美ちゃんとわかれて、まっすぐ家へ帰った。今日は、彼と約束している日なのだ。

「おじやますます」

「奏多くん、いらつしやーい！」

ママは、家やつてきた彼を見るなり、満面の笑みを浮かべた。

「ふふふー。奏多くんったら、さらに男前になったわねえ。中学でもモテモテなんじゃない？」

「あー……。声をかけられることは、増えたかもしれないですね。わずらわしいことのほうが多いですけど」

「そうなのお？」

「はい。オレ、莉子以外の女子に興味ないので」

「ごほごほ」

か、奏多!? ママの前でなに恥ずかしいこと言ってくれてんの!
焦るわたしに、今度はママが追撃してきた。

「あらあらあら。奏多くんは、うちの莉子にはもつたいないほい子よねえ。莉子。奏多くんは愛想をつかさねちゃダメよ」

「えっ。莉子に愛想をつかさなくて、絶対にありえないですけど……」

「はいはい、わかったからもういいよ! ママっ。わたしたち、部屋に行ってるから!」

ママのニヤニヤ笑顔から逃げるように、奏多の背中を押して階段を駆けあがる。

さつきからずつと顔が熱い。ゆだりそうだ。

二人でわたしの部屋まで移動して、大きく息をついた。

「奏多っ! ママの前で、あーいうこと言うのやめてよっ」

「なんで? 事実を言っつて、なにが悪いの」

「じ、事実……」

わたし以外の女子に興味はないとか、だいぶすごいこと言っつてた気がするけど……

口ごもつたわたしを、奏多がじいつと見つめてくる。

か、顔が近い! まっ毛まで見えてるよ。肌、きめこまかすぎなんだけど!

「オレは、莉子しか見てない」

「ま、また、そうやって恥ずかしいこと言う!」

「だって、ほんとのことだから」

するりと伸びてきた彼の手が、わたしの頭をふわりとなでる。

その心地よさに思わず目をほそめたら、奏多は幸せそうに笑った。

「かわいい。ねえ、抱きしめてもいい?」

「へっ! そ、それはダメっ!」

こ、こ、こ、心の準備ができておりませんので!

「なんで? 莉子はオレの婚約者なのに」

奏多は、小さな子供のようにいじけて、眉尻を下げた。

わたしが抱えている、とんでもないひみつ。

それは、わたしが桜峰学園の王子さまである漣奏多の婚約者だということだ。

なぜ、わたしみたいな平凡女子と、奏多のような王子さまが婚約者同士になったのか。その発端は、わたしと奏多のママにある。

二人は二十年來の大親友なんだ。

わたしが初めて奏多に出会ったのは、小学二年生のときだった。

『りこ。かなたくと、かなたママが遊びにきたわよ』

ママと呼ばれて玄関に出ていくと、小柄な男の子が、自分のママのスカートのスソをつまんで、心細そうにわたしのことを見ていた。

『かなたくん。はじめまして！』

『……………』

奏多の第一印象は天使！

いまはかつこよさとかわいさが同居しているけど、昔はかわいい系だったんだよね。

『ほら。かなたも、りこちゃんにアイサツしなさい』

奏多ママにうながされて、奏多はおずおずと頭を下げた。

『は、はじめまして』

大きな瞳はうるんでいて、ママのスカートをつかむ小さな手は震えてた。

ガチガチに緊張している奏多を見つめながら、わたしは心の中で決意したんだ。

この子を守ってあげなきゃ、って。

出会って間もないころの奏多は、そのくらい大人しい子だったの。

奏多ママは結婚してからもバリバリ働いていて、奏多はよくわたしの家にあずけられて

いたんだけど、すごく無口だった。

しゃべらない代わりに、よく絵を描いていたな。

色鉛筆セットとスケッチブックを持ってきて、一生懸命に手を動かしていた。

わたしは、そんな奏多を横目に、マンガを読んだり宿題をしたりしていた。

まったく話さない日がほとんどだったけど、奏多は小動物みたいでかわいかったから、目があっただけで満足していたんだと思う。

でも、じょじょにそれだけじゃ物足りなくなつて、もっと仲よくなりたいと思うようになつた。

絵ばかり描いている奏多に、かまってほしくなつたんだ。

『かなたくんは、いつも絵を描いてるね!』

『…ダメだった?』

おびえたように絵を描く手を止めた奏多に、慌てて弁解した。

『ううん! わたし、かなたくんが絵を描く時のさらさらうって音、大好き! なんだか落ちつくから。ねえ、いまはなんの絵を描いているの?』

ぱちぱちと瞬きをしながら戸惑う彼はかわいらしくて、顔がほころんだ。

その2 たった一人の特別な男の子

出会って間もないころの奏多はとても大人しかったけど、一緒に過ごす時間が長くなるうちに心を開いてくれるようになった。

たくさんの思い出があるけど、忘れもしないのは奏多と出会ってから初めての冬だ。

きたる二月十四日の、バレンタインデー。

その日は、好きな人にお菓子をあげる日だとママから聞いて、奏多に手作りのお菓子をあげようと張りきっていたんだ。

『りこ。クッキー作り、ママは本当に手伝わなくて平気なの?』

『だーいじようぶだって! 何度か練習したし、今日は一人で作る!』

『そー? じゃあ、ママはちゃんと買い物に出るね』

『はい!』

せっかくだから、一人でがんばりたい。

奏多に一人で作ったんだよって自慢したいから！

調子に乗って、ママの申し出を断ったんだけど……

『できたーっ！ さーて、いったきまー』

……うわっ!?』

できあがったココアクッキーに似た物体をかじったとき、激しい後悔におそわれた。

『なにこれっ!? かっつっつた!』

おせんべいかと思うほどのかたさ！ 歯が折れちゃいそうだ。

なんで！ ママと作ったときはサクサクしていて、あんなにおいしかったのに！

これはひどい。人の食べ物ですらないよ。



不器用なのに、調子に乗って一人で作ったりしたからだ……

大失敗したクッキーを前に、床にのめりこんじやいそうなほど落ちこんでいたら。

『りこ』

『……えっ。か、かなた!?』

真うしろに奏多が立っていて、飛びあがりそうなくらい驚いた。

『な、ななな、なんでいるの?』

『ママから、野崎さんにおつかいを頼まれたんだ。家の前で野崎さんに会って、中にいれてくれた』

『ええっ！ 気づかなかったなあ』

『話しかけようか迷ったんだけど、待ってたんだよ。りこ、すごく一生懸命だったから』

うわあ~~~~！ なんてバッドタイミング！

奏多と会うのはいつでも大歓迎と言いたいところだけど、いまだけはそんな気分じゃない。

ママ、空気が読んでよ~~~~！

わたしが内心ムンクの叫び状態になっていることにも気がつかず、奏多は、魔のカチコチクッキーに興味を持ってしまった。

『それ、リコが作ったんだよね？』

『……そ、そうだけど』

『食べたいな』

『ダメ！』

『どうして？ こんなに、たくさんあるのに』

『……っ。ダメったらダメなの!!』

だってそれ、人の食べ物じゃないから！

そう素直に打ちあけてしまえば、奏多も引き下がったのかもしれない。

でも、そこまで正直になるのは気恥ずかしくて、意地をはったんだ。

『そんなに必死に止められたら、逆に気になるよ』

奏多は、わたしを無視して、ひょいっとクッキーを食べてしまった……

『あーっ！』

『ん……』

奏多に、魔のクッキーを食べられてしまった！

絶望的だ。

やさしい彼でも『こんなにもまずいクッキー、どうやったら作れるの？』ってあきれるに違いない。

わたしは、奏多に笑顔になってほしくて作ったのに……

『ん……』

なかなか飲みこめずにいる奏多を前に、どんどん消えたいような気持ちになっていく。

『ううっ……。だから、食べないでって言ったのに。あなたのバカッ！』

悲しさと悔しさとで、みっともなく涙まで出てくる。

そんなわたしを見つめながら、奏多は激マズクッキーをこくりと飲みこんだ。

『えっと……勝手に食べてごめんね？ でも、おいしかったよ。リコ、大げさすぎ』

『はあ？ ウソつかないでよ！ どう考えてもまずいじゃん！』

『たしかに、かたかったけど……味は、ちゃんとおいしかった。なにより、リコが作った

フッキーだもん。おいしくないわけがないよ』

誰が食べても、思わず吐きだしてしまいそうなほど、ひどいできたのに。

奏多は、涙目になったわたしを安心させるように、二枚三枚と手をのばして食べきったんだ。

うれしさと申し訳なさどと恥ずかしさがうずまいて、胸がいっぱいだった。

『……ほ、ほんととは、もっとサクサクとしてる、おいしいのができる予定だったの』

『うん。次に作ったら、また食べさせてね』

『……いいの?』

『当然でしょ。それより、どうして急に一人で作ろうと思ったの?』

『もうすぐバレンタインだから。あなたに受けとってほしくて』

ぎゅっと服のはしをつかみながら答えると、奏多はなぜか顔を赤らめて、声を震わせた。

『えっと……。オレのため、だったの……?』

『そうだよ。バレンタインは、好きな人にお菓子をおあげる日だって聞いたから』

『そっか……。ふふつ。そっかあ』

奏多はおさえきれないというように、笑みをこぼした。

急に上機嫌になってニコニコしながら、首をかしげた。

『残りもぜんぶもらっていい?』

『ウソでしょ!? そんなに食べたらお腹こわすよ!』

うれしい気持ち以上に、奏多の胃が心配になってしまふ。

本気で止めたんだけど、聞く耳を持ってもらえなかった。

『こわさないよ。それに、りがオレのために作ってくれたフッキーを、他の誰かに食べられるほうが嫌だ』

まじめな顔で主張されて、胸がぎゅうつと締めつけられて痛いぐらいだった。

なんでだろう。

ドキドキしすぎて、奏多の顔をまっすぐ見られない。

奏多は、守ってあげたい、かわいい男の子だったはずなのに。

宣言どおり、わたしの失敗作をぺろりと平らげて『また、作ってね』と笑われ、胸の高

鳴りが止まらなかった。

あの日からずっと、奏多はわたしにとって、たった一人の特別な男の子なんだ。

その3 婚約の理由

奏多と出会ってから一年が経って、わたしたちは小学三年生になった。

『かなた！ ママから聞いたんだけど、うちの近所に引っこしてくるってホント!?』

『うん。りこ、もう知ってたんだね』

『すぐーくうれしいっ！ これからは、学校でもかなたに会えるんだね』

飛びあがって喜ぶわたしに、奏多は顔を赤くしながら『うん。オレもううれしいよ』って笑ってくれた。

わたしにとっての奏多は、そばにいるのが当たり前、大切な幼なじみ。

でも……、奏多は背が伸びるにつれて、どんどんみんなの王子さまになっていった。

『キヤーツ！ 漣くんのいまのシュートやばくない!?』

『かっこよすぎ〜!』

球技大会に出れば大活躍で、その日一番のヒーロー。

『今回の小テストで満点をとったのは、漣くんです!』

『またかよ! 頭よすぎだろ』

『すごい! 漣くんに勉強教えてもらいたいなあ』

テストはいつも満点。

日々かつこよく成長していく奏多に、学校中のみんなが憧れるようになった。

『莉子ちゃんって、漣くんの幼なじみなんですよ?』

『うん。そうだよ』

『いーな、いーなあ。あんなに完ぺきな幼なじみがいるなんて、うらやましいよ』

そして、奏多の幼なじみであるわたしには、**センボウの視線**がつきまとうようになった。奏多はずっとみんなの注目の的だった。

その調子のまま、小学五年生になった彼は、とにかくモテまくった。

『うわ……また、きてる』

下駄箱を開き、困ったように眉根を寄せる彼の姿を、たびたび目にするようになった。

ハートのシールで封がされた、パステルカラーの便せん。

ラブレターだと一目でわかって、心にモヤモヤが広がった。

かつこよくて、勉強も運動もできる奏多を、女の子が放っておくわけがなかったんだ。のどからせりあがってくる、苦いツバを必死に飲みこむ。

ほんとは、ラブレターなんて受けとらないでって叫びたい。

でも、ただの幼なじみのわたしに、そんな権利はない。

『先週もきてたね。奏多、モテモテだ』

ヘンに思われないように笑顔をつくらうたら、奏多はまじめな顔をして聞いてきた。

『ねえ、莉子。みんなにオレたちの関係のことを言っている?』

『関係って? 幼なじみだってことは、みんな知ってると思うけど』

『そっぢゃないよ』

『えっと……なんのこと?』

本気でわからず、困って首をかしげたら、奏多は焦れたように言ったんだ。

『だから、婚約してること。オレら、結婚するでしょ?』

結婚!?

世界がひっくりかえったみたいな衝撃を受けた。

奏多から衝撃発言を聞いたその日は、光の速さで帰宅した。

『ねえっ！ わたしと奏多が結婚するって、どういうこと!?』

『あれ〜？ そいうえば、まだ莉子には言っただけだっけえ』

わたしは、ママと奏多ママとの間で交わされたという盟約を、そのとき初めて聞いたんだ。

二人は、高校時代からの大親友。

大学からは、お互い別々の道を歩んだけど、その間も定期的に連絡を取っていてずっと仲よšieいたんだって。

そこまでは、うなずける。

問題はここからだ。

二人は同時期に子供を授かり、やがて生まれてくるわたしたちへと想いをはせた。

『もしも、お互いの子供が同性だったら、私たちみたいな親友になれるといいね〜』

うんうん。

『もしも、異性の子供が生まれて、気があいそうなら結婚させよう！ そしたら私たち、家族になれるね』

うんうん………んんんんん？

なにその空気よりも軽いノリ！ 全然、意味わからないんだけど!?

かくして生まれてきたのが、わたしと奏多だ。

わたしは女の子で、奏多は男の子。

つつこみどころまんさいながらも、わたしたちは生まれた瞬間から婚約者同士だったのだ。

『それにしても、奏多くんってあんなにイケメンなのにまったく浮ついてないし、純粋でいい子よねえ。生まれながらにして、あんなにできた婚約者がいるなんて、莉子は幸せ者ね！ ママに感謝しなさい!』

なんということだ………!

とんでもない真実を知ってしまったわたしは、ひたすら動揺していた。

翌日の朝、わたしは念のために、奏多本人にも確認をとった。

『か、奏多。えっと、その……結婚の、ことだけど……奏多は、いつから知ってたの?』

『え? けっこう前だけど。莉子は知らなかったの?』
当然のように受けいれていた彼に、またもアゼンとした。

『だからさ、ラブレターとか困るんだよね。莉子とのこと、はっきり、みんなにも言っておいたほうがいいと思うんだけど』

『み、みんなには言わないでっ!』

だって……

奏多の幼なじみというだけでも、たまに、風当たりが強いのに。

実は婚約者でもあったなんて知られたら、それこそ周りの目が怖いよ!

とは、さすがに本人に伝えることはできず、ドキドキしながら話の流れを変えてみた。

『奏多は……わ、わたしとの結婚のこと、どう思ってるの?』

『どうもなにも。莉子以外の女の子のことはよくわからないし、考えたこともないかな』

ああ、そっか。

奏多は、自分の意志で、わたしを選んだわけじゃない。

純粹だから、疑いもせずに、わたしと結婚するという運命を受けただけなんだ。

もしくは、やさしいから拒否できなかっただけの可能性もある。

あくまでも、彼は、運命にわたしを選ばされただけ。

気がついた瞬間、ほてっていた体がすつと冷えた。

その日から、当たり前のように奏多の隣にいる自分に、疑問を抱くようになった。

『莉子。なにかあった?』

『えっ。あ……なんでも、ないよ』

『ウソ。隠しごとしてるでしょ。オレには、言えないような悩みなの?』

あのきらきらした瞳でまっすぐ見つめられると、胸の内のドロドロとした黒いものを見

透かされそうで怖かった。

でもさ、聞けるわけじゃないじゃん。

奏多は、凡人のわたしの婚約者でいることに疑問を持ったことはないの？　なんてさ。傷つくのが怖くて、彼の本心に触れることはできなかった。

『……悩みなんで、ないよ。奏多は心配性だなあ』

あの目を境に、わたしたちはなんでも話せる関係ではなくなったのかもしれない。そして、本音を聞くことができないまま、中学生になったんだ。

その4 危ない！

「今日は、五月に行われる**体育祭の実行委員**を決めます！」
桜峰学園の体育祭は、五月中旬に行われる。

わたしたち一年生にとっては中学校で初めてのイベントだ。体育の授業でも、すでに競技の練習がはじまっている。

楽しみだなあ。わたし、体を動かすのは得意なほうなんだよね！

「男女一人ずつです。立候補者はいませんかあ」

担任の**幸先生**が教室中に声をかけるも、誰からも反応はなし。

みんな、誰かが手を挙げるのを待っている空気だ。

それなら、やってみようかな！

「わたし、やります」

「野崎さん、ありがとうございます！　女子は野崎さんで決まりね」

「幸先生が笑みを浮かべて、黒板にわたしの名前を書く。他の女の子たちは、ホツとしたように息をついていた。」

「いまは体験入部期間中だけど、部活に入る子からしたら、委員会の仕事はジャマになるもんね。」

「わたしは中学で部活に入る気がないから、引き受けてもいいかなと思っただ。」

「男子の立候補者はいませんかあ。今日は決まるまで帰れませんかよ。」

「じゃあ、オレやります」

「奏多が、まっすぐに手を挙げた瞬間。」

「教室中に、雷が落ちたようなヒリついた空気が走った。」

「はいっ！ やっぱり、あたしも実行委員やりたいです！」

「あつ、抜けがけずるーい。私もやりたいのに！」

「先生。これだけ立候補者が多いなら、女子の実行委員は公平にじゃんけんやあみだくじで決めるべきではないでしょうか！」

「ひええ。さっきまで誰も見向きもしていなかったのに、突然、争奪戦へと早変わりだよ。」

「女子って、現金だよなあ……」

「イケメンは、いいよなあ……」

「心なしか鼻息が荒くなっている女子を横目に、男子たちは遠い目でばやいている。」

「漣と同じクラスにいる限り、僕らは絶対に日の目を見ないね……」

「むしろ、別クラスになってもだろうな」

「おおおい！ 彼女の一人もできない中学校生活なんて俺は認めねえぞ！ 漣、一刻も早く彼女を作れ！」

「そうだそうだー！ この際、学園一の美少女と付き合うのでもかまわねえぞ！」

「意図せず大波乱を巻きおこしてしまった張本人が、困ったように口を開く。」

「彼女はいないけど、オレには、こん……」

「ちよっ！ 奏多、もしかして！」

「うわあああああああつ！」

「野崎さんどうかしましたか!?」

「突然大きな声を出したわたしを見て、幸先生が驚く。」

「い、いやつ。ちよつとペンケースに虫が止まってたような気がしたんだけど、見間違いでした〜っ！ 騒いじやつてごめんなさい！」

いま、わたしとの関係をあつさりバラそうとしてたよね！？
心臓止まりそうだったよ！

「はあ、そうですか。それにしても、すごい悲鳴でしたね……」

人のいい幸先生は、わたしの苦しいウソを信じてくれたけど、奏多の一举一動に注目している他の子たちまではごまかしきれていなかった。

「王子、さっきなにか言いかけなかった……？」

「絶対、言いかけてたよ！」

この流れはやばい！

「漣くん！ なんて言おうとしたの!？」

奏多が口を開くよりも先に、高速で先手を打つ。

「あつ。話、さえぎつちやつてごめんね！ 漣くんっ」

あえての苗字呼び！ 決して深い仲ではありませんよ作戦だ。

冷や汗を流しながら、必死で奏多を見つめると、彼は驚いたように目をパチクリとさせていた。

だけどそれも一瞬のことで、すぐにわたしから視線をそらした。

「……うん。なにも言っていないよ、野崎さん」

ホッと胸をなでおろすのと同時に、なんだか、ちくりと胸が痛んだ。

けど、先に他人のフリをはじめたわたしに、こんな感情を抱く資格はないよね。

結局、幸先生が「もめていたようですが、女子は最初に立候補してくれた野崎さん、男子は漣くんが決まりにしますね！ はい、解散解散ー！」としめくり、やつとホーム

ルームが終わったのだ。

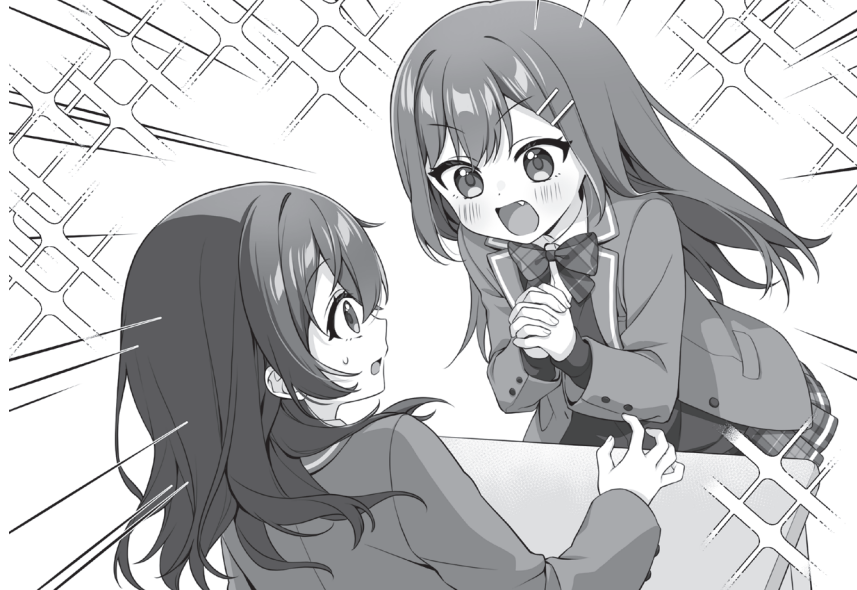
解散になるなり、由美ちゃんがわたしの机をめがけて突撃してきた。

「莉子！ 莉子は、一体、前世でどんな徳を積んだの!？」

「は……？」

ポカンとするわたしに、由美ちゃんは両手を胸の前で組んで熱弁をふるった。

「とぼけないでっ！ さっきのホームルームのことだよ！ 莉子が立候補したすぐあとに



漣くんが手を挙げるなんて、どういうこと？
前世はマザー・テレサ!?」

うっ。一難去ったと思ったら、早速また一難だよ……!

「いやゝ。たまたまじゃないかなあ」

「漣くんと同じ委員会なんて! うわあああ、うらやましすぎて泣けてくるっ」

「そんなにやりたいなら、代わってもいいよ?」

「それはダメだよ!」

「なんで?」

きよんとしたわたしを、由美ちゃんがピシツと指さす。

「**抜け駆けは禁止なの!** 漣くんはみんなの

王子さまだもん。これは漣奏多親衛隊の入隊テストに出るところだから、しっかり覚えてよね!」

「は、はあ……」

漣奏多親衛隊、入隊テストまであるんだ。ということは、由美ちゃんはしつかり合格して、無事に入隊したってことだよね……

由美ちゃんに、わたしが奏多の婚約者なのだと知られたらどんな目にあうかわからない。恐ろしい未来を想像して、身震いした。

「と、ところでさっ。由美ちゃんの持つてるうさぎのペンケース、すつごくかわいいよね。どこで買ったの?」

どうにか話をそらすべく思いついたのは、由美ちゃん愛用のうさぎのペンケースだった。ゆるつとしたうさぎの顔が、そのままペンケースになっている。

とっさの思いつきだったけど、前からかわいいと思っていたのは本当だ。

「ふっふーん。莉子、いいところに気がついたねえ」

「いいところ?」

「そうっ！ 実はこれね、**姫ちゃん**とおそろいのの！」

「姫ちゃん……っっていうと、**現役JCモデルの月城姫乃ちゃん**？」

「そうそう！ こーゆーのウトそうな莉子でも、姫ちゃんのこととはさすがに知ってるかあ」

月城姫乃。

みんなに『姫ちゃん』と呼ばれて親しまれている彼女は、**人気雑誌『smile』**で活躍中の現役JCモデルだ。

笑顔がキュートで、どんなお洋服でも似合っちゃう彼女は、本物のお姫さまみたいにきらきらしている。

SNSのフォロワー数もすごいし、いまや女子中学生で彼女を知らない子はいないだろう。

「あたし、姫ちゃんの大ファンなんだ！ このペンケースも姫ちゃんが『姫の愛用ペンケース』ってオンスタに投稿したとたんに、飛ぶように売れはじめたんだよ。手にいれるのに、期間限定シヨップで一時間も並んじやつたし」

「へええ。そうだったんだ」

「姫ちゃんはずごいよねえ。あたしたちと同年なのに、バリバリお仕事してて、ファンもたくさんいてさあ」

「そう、だよね」

姫ちゃんみたいな人には、世界が違って見えているんだろうな。生まれながらにして主役になれる、輝かしい人生。

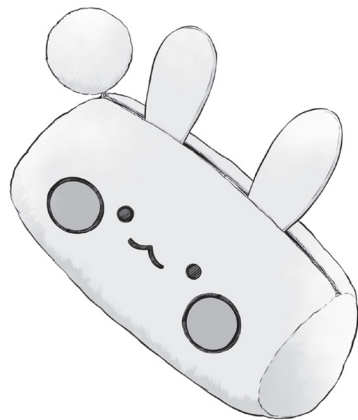
もしも、奏多の幼なじみがわたしじゃなくて、彼女みたいなお姫さまだったら。

みんなに、『運命の二人だね』って認めてもらえたのかな。

暗い海へ落ちていきそうになった思考は、近づいてきた足音によってさえぎられた。

「由美ちゃん。そろそろ音楽室に向かわないと、パート練習に間にあわないよう！」

「あれっ、もうそんな時間か！ おしやべりしすぎちゃった。莉子、また明日ね！」



「う、うん！ またね」
迎えにきた子と一緒に吹奏楽部の体験入部に向かう由美ちゃんを見送って、一人で帰宅した。

その5 キュン死にしちゃう！

その日の放課後も、前からの約束どおり、奏多は家にやってきた。
……のだけど、さつきから、ずーーーーっと無言。

机の上に広げたスケッチブックに向かって、黙々と絵を描いている。
集中していると黙っているときもあるけど、今日のはそうじゃない。
その証拠に、手がさつぱり動いてないもん。

これは……どこからどう見てもフキゲンな奏多だ。

「そういえばね、奏多が貸してくれたマンガ、読み終わったよ！」

「……………」

「すぐくおもしろくて、あつという間に読んじゃった！ まさか相棒に裏切られるなんてね！ 主人公、めちやくちやピンチだよ。このあと、どうなっちゃうのかなあ」

「……………」

「ねえ、奏多。聞いてる……？」

焦れて奏多の隣に座ると、彼はやつと鉛筆を机に置いてくれた。

それから、うつむいて、小さな声で白状した。

「……無視して、ごめん。すねてました」

ですよね……。明らかに様子がおかしかったもん。

「すねてたって……」

思い当たるフシがあるから心が痛い……。学校でのわたしの態度が原因だね。

「莉子は、他人みたいな顔で漣くんって呼ばれたとき、すごく傷ついた」

鋭い針で刺されたみたいに胸が痛む。

自分から言ったことだけど、いざ奏多に苗字で呼ばれたら悲しかったし、大好きな奏多

と他人のフリをするなんて本当は嫌だ。

だけど……仕方ないんだ。

口ごもるわたしに、奏多は言う。

「せつかくまた莉子と同じクラスになれたのに。なんで莉子は学校でオレを避けるの？」

「それは……」

わたしが、奏多と釣りあっていないからだ。

『莉子は、ズルいよ……。なんの努力もしてないのに、漣くんの隣にいられるんだね』

耳の奥によみがえった、当時の親友の涙声に息苦しくなる。

嫌だ。もう、あんな辛い思いはしたくないよ。

「莉子……？」

震えながらきつく目をつぶったら、奏多が心配そうに顔をのぞきこんできた。

「大丈夫？ 気分が悪いの？」

「う、ううん。なんでもない」

沙也とのことを、奏多にだけは知られたくない。

これ以上深掘りされないように、無理やり笑みを浮かべた。

そしたら、するりと伸びてきた彼の腕の中に、閉じこめられていた。

「か、奏多……!？」

突然、抱きしめられて、心臓が一気に加速していく。



うるさいぐらい高鳴った鼓動が、奏多にまで聞こえちゃいそうだ。

「あ、の……」

「顔色が悪いように見えたから。無理してない？」

「し、心配させてごめんね！ もう大丈夫っ！ ちょっと目まいがただけだから」

「……ほんとに？」

「ほんとにほんと！ だから、そのっ……腕を、放してもらえますか……？」

「……なんで？」

「へ!? な、なんでって……」

このままくっついてたら、キュンキュンしすぎて死んじゃいそうだからだよ！
恥ずかしすぎて答えられないわたしを、奏多がさびしそうな声で追いつめてくる。

「莉子は、オレに抱きしめられるのが嫌？」

「つつ〜！ 聞き方がずるい！」

「だって、莉子が嫌だと思ふことはしたくないもん。けどね……オレは、ずっとこうしてみたかったよ」

奏多が、回した腕にぎゅつと力をこめる。

どうしよう。ほんとに、死んじやいそうなくらい、ドキドキしてる。

「お願い。嫌じゃなかったら、素直になつて」

奏多は、ずるい。

「奏多にされるのは、い、嫌じゃない。……うれしいよ」

顔から火が出そうなほど、恥ずかしい。

勇気を出して、彼の背中におずおずと手を回したら、奏多は甘えるようにわたしの肩に顔をうずめた。

「はー……幸せ。いやされる」

「い、いつまでこうしてるの？」

「ずっと」

「ダメに決まつてるでしょ！」

「学校では、必要以上に話しかけないようにするから。二人きりのときはいいでしょ？」

「えっ……」

「婚約者だつてバレたら、みんなにからかわれる。莉子はそれが嫌で、学校ではオレと他人のフリをしたいのかと思つたけど違うの？」

学校で奏多と他人のフリをしたい本当の理由は、ちよつと違う。

「ううん。……違わないよ」

だけど、わたしはあえて、彼のカン違いを正さなかった。

うらかな春の日差しがあたたかい、**体育の授業中**のこと。

グラウンドの隅で整列するわたしたちに、体育のスキンヘッド先生は高らかに告げた。

「体育祭で行われる**選拔リレー**のメンバーだが、タイム結果から、**結城と野崎**に決定した！」

やつたー！ がんばって走ったかいがあつたなあ。

「すごいすごい！ ああ、結城さんに並ぶなんて、莉子、めちやくちや足速いんだね！」

「ありがとう、由美ちゃん」

びよんびよんと跳ねながら、まるで自分のことのように喜んでくれる由美ちゃんに胸が

あたたかくなる。

「えへへ。わたし、運動は得意なほうなんだ」

「いいなあ。あたしなんて、下から数えたほうが早いぐらいだよ」

いつも元気な由美ちゃんが、そこまで運動が得意じゃないのは正直ちょっと意外かも。

「足が速い人ってかっこいいよねえ」

由美ちゃんの視線の先には、グラウンドのもう半分で五十メートル走のタイムを測定している男子たちの姿。

五、六人が連なって走るなか、一人だけ飛びぬけていた。

「漣くん、断トツの速さ……っ！」

「風のようだね！」

「いや、流れ星だよ！」

どっちもそんなに変わらないのでは……？ とはつつこみづらい。

触らぬ奏多ファンにたたりなし、つてね。

「はあああ。授業中のクールかつ理知的な漣くんも素敵だけど、少し息苦しそうに走る姿

も色気があつて尊いっ、推せる！ ああ、漣くんは、どうしてあんなにうるわしいの？

もしかして神なの??」

うわああ……由美ちゃんの親衛隊スイッチが入ってしまった！

「男子の選抜メンバーは、もちろん漣くんが決まりだろうねえ」

「きやーっ！ 体育祭、楽しみだなあ。めっちゃ応援しよーっ！」

「騒ぐな、女子ども！ いまは授業中だぞ！」

「そりゃあ、騒ぎますよ！ だって、漣くんが走ってるんですよ!」

「漣くんの勇姿を見逃して一生後悔したらどうするんですか！ 先生は責任を取ってくれるんですか!？」

「うっ……。まあ、漣がかっこいいのは認めるが……」

サングラスにスキンヘッドというイカつすぎる見た目をしている先生は、ビックリするほど押しに弱かった。

あつという間に奏多の話題一色になってしまい、話に入りそびれていたら、意外な人に話しかけられた。